ネブラスカのインディアン
——その征圧の過去と現在——

小　野　　修

は じ め に

ネブラスカ地方のインディアンについての論及がアメリカ史の中に登場してくるのは19世紀の中葉からである[1]. 1854年, ネブラスカが準州となって, 入植可能となり, 東部からの移住者の奔流のような流れが, ミズーリ河を越えはじめるまでに, 現在のネブラスカ州（準州成立時の領域は, 隣接のコロラド, ワイオミング, 南北ダコタ, モンタナの各州にまで拡って, 現在の5倍の面積を占めていた）の東部および南部地域はインディアンより接収され合衆国の土地になっていた.

ネブラスカという言葉は, オマハ族（スー族系統）の言葉で「浅い川」を意味し, ネブラスカ州を西から東へ貫流するプラット河を指している. ネブラスカはジェファソン大統領の時代（1803年）にアメリカがフランスより買収した「ルイジアナ」地方の中央部に位置していた.

19世紀の前半には, このミズーリ河とロッキー山脈とのあいだに拡がる広大な地域は人の住むことのできない「アメリカ大砂漠（グレート・アメリカン・デザート）」とされ, 野獣や遊牧民以外は居住不可能の地域とみなされていた. 1817年に, 英国の博物学者ジョン・ブラッドベリは早くも砂漠説に反論して「この土地も将来は人が入り農作が行われ, 世界有数の美しい国土となるだろう」と述べ, 森林のない土地への進出をためらっている開拓者の無策を衝いた. しかし, このような見方は全く例外的であった[2]. 1820年に, いわゆるインディアン地域（テリトリ）といわれる保留地が後にオクラホマ州となる地方につくられ, 東部

のインディアンの部族の移転がはじまった．ジャクソン大統領の勧告により，1830年，ミシシッピー川以西をインディアンの土地とする「インディアン強制移住法（リムーヴァル・アクト）」ができたのも，この地方は白人の入植に不向きとみなされたためであった．白人の入植地からインディアンをこの地に強制「移住」させることによって白人入植者には土地を，インディアンには「保留地」での安全を保障し，相互の争いを避けさせ，ひいてはインディアンを絶滅から救うという考えは本来，ルイジアナ買収後，ジェファソン大統領が考え出したものであった．この考えがマディソンとモンロー両大統領をへてジャクソン大統領に受けつがれて実行に移された[3]．法的措置は移住者の西漸速度を追いかけるかたちとなり，「ミシシッピー河以西」はやがて，西経95度線まで西に移された．ジャクソンの時代，1834年，陸軍省内にインディアン部局ができたが，5年後内務省ができるとインディアン総務局として移された．また，1834年の「インディアン交易法（トレイド・アクト）」は，白人がインディアン所有地に移住することを禁じ，インディアンとの交易を許可制として，インディアンと白人との度重なる摩擦—というよりインディアンに対する虐待—を防ぐための隔離策であった．

西経95度線はミズーリ河東，現在のイリノイ州の西部を通り，ミズーリ州，アーカンソー州の西境界を南下し，植生的にはこれを境に森林が切れ，大草原がはじまる．この線から西の地方への白人の移住と許可なしでインディアンと交易することは禁じられ，越境を封じるために数々の砦が設置された．（それまでにも，アトキンソン砦が現在のネブラスカ州オマハ市の北郊にあったが，1827年廃止され，数マイル南のベルヴュ砦が設置された．ここは現在，アメリカの戦略空軍司令部の所在地となっている．そこが北米大陸のほぼ中心でアメリカ合衆国の人口重心にあたるためである．）ミシシッピ以東のインディアン諸族は軍隊ににによって強制的にインディアン地域（テリトリー）に移住させられた．チェロキー族は，1838—39年，冬のさなか裸足でジョージアからミシシッピ以西まで強制行進させられ，14000人のう

ち4000人が途中で死に，彼らの通ったあとには「涙の道」the Trail of Tears ができた[4]．しかし，部族の多くは，押しつけられた新しい土地をほどなくとり上げられることになるのであった．

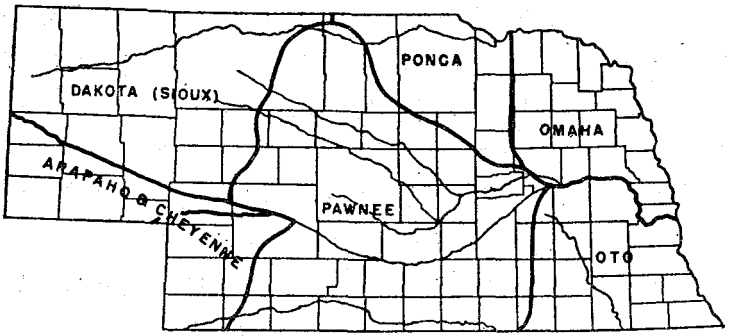
第1章 征圧の過程

1800年頃ネブラスカに居住していたインディアン[5]は大別して，中央部から南部へかけての農耕的で定住的部族（ポーニー族），北東部ミズーリ川沿岸の半定住的部族（オマハ族，ポンカ族，オト族，アイオワ族，ミズーリア族などスー族系統諸族），西部の遊牧的部族（ダコタ・スー族，シャイアン族，アラパホ族，コマンチ族）がいた．彼らはいづれも白人と接触する段階までは石器を使用し，もともと農耕部族でミネソタにいたシャイアン族や，ミズーリ河以東，あるいは上流から徐々に駆逐されてこの地方に移住した部族もあった．これら諸族のうち，定住的で農耕的な部族の沃地及び灌漑可能地域が自作農地を求める白人により真先に収奪され，次いで，半定住部族の土地が牧草地として狙われ，改良食肉牛の放牧のために野牛（バイソン）を組織的に絶滅させながら奪いとられていった．最後まで残されたネブラスカ北西部の乾燥地は，その地下資源のために強制収用するかたちをとった．1830年代末に太平洋岸をめざす毛皮商人や鉱山師たちによって頻繁に利用されるようになったオレゴン道（トレイル）は，プラット河に沿い，本来はオト族，ポーニー族，アラポホ族，シャイアン族，ダコタ（スー）族に属した土地を通っていた．ネブラスカにはこのほか，北東地方にオマハ族とポンカ族がいた．ポンカ族はジェファソン大統領の命令で19世紀はじめミズーリ河経由で大陸横断に赴いたルイスとクラークの一行を歓待した過去があり，白人に敵対的ではなかったが，1858年には殆どの領土を収用された．

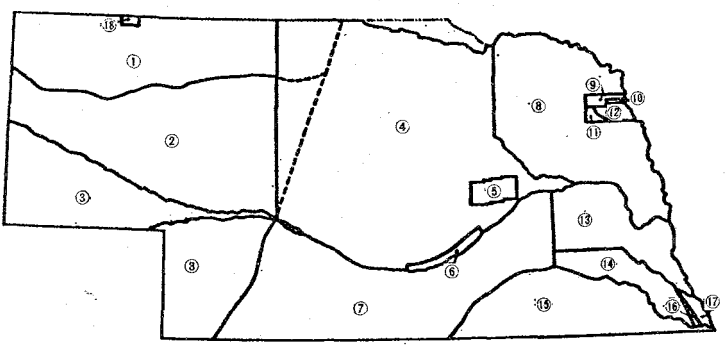
1830年代のはじめ頃までに，プラット河以南の土地はカンサス族，オト族，ミズーリ族，ポーニー族から連邦政府によって平和的に収用された．

オマハ族はその予言者「ビッグ・エルク」から「近いうちに大洪水がきて，けものも鳥も消えてしまう．その時のために最善の方策をとれ[6]」と忠告されていたので，1854年新しい保留地に入ることを拒まなかった．その保留地は1882年までに4回にわたる割譲で¼になって現在に至っている．ネブラスカ地方において，もっとも古くから在住し，ネブラスカ州の⅓の面積（ほぼ，近畿圏に相当）を占有しネブラスカ最大の部族だったポーニー族は，1833年にはその最良の土地であるプラット河以南を手離し，1857年には残りの殆どを合衆国に譲ったあと，ネブラスカ中央部のループ・リヴァー沿いの保留地に住んだが，1873年ネブラスカ南部を遊牧中，オガララ・スー族とブルレ・スー族に大量虐殺され，3年後の1875年にはオクラホマのインディアン地域に代替地を選んでネブラスカを去った．

1840年代のオレゴン熱（43年），オレゴン割譲（46年），モルモン教徒の移住（46年），メキシコとの戦争（46—48年），それに続くゴールド・ラッシュ（49年）はプラット河沿いのオレゴン道（トレイル）を大陸横断の中心的街道に変貌させた．すでにテキサスは1845年に併合されており，アメリカ合衆国はこの10年足らずの間に，太平洋からメキシコ湾に至る広大な領土を確保した．ネブラスカはもはや西の辺境ではなく，合衆国中央部に位置することとなった．インディアン地方としての「ルイジアナ地方」は，たちまち「拡大の天命（マンフェスト・デスティニイ）」を担った人々の奔流の中にまき込まれることになる．自由地を求める人々は，温暖なカルフォルニアに殺到し，そこで自由地が分配されつくすと，次に，その頃まで「アメリカ大砂漠」とされ，森も水もなく「文明人には居住不可能」（エドウィン・ブライアント[7]）とみなされていた大平原の土地を目指した．1854年のネブラスカ準州の成立時には現在のネブラスカ州の東半分にあたる領域は，ごくわずかな保留地をのぞき悉く連邦政府に収用されており，1861年，ノース・プラット河以南のアラパホ族とシャイアン族の共有地が収用されたあとは，ネブラスカの北西部にスー族の土地が残されている限りとなった．



INDIAN TRIBES OF NEBRASKA, ABOUT 1800



INDIAN LAND CESSIONS IN NEBRASKA

15 Kansas	1825	8 Omaha	1854	5 Pawnee	1875
16 Oto	1830	4 Pawnee	1857	1 Sioux, N. Cheyenne, & Arapaho	1876
17 Oto	1830	3 Arapaho & Cheyenne	1861	11 Omaha	1882
14 Oto & Missouri	1833	9 Omaha	1865	12 Omaha	1882
7 Pawnee	1833	10 Omaha	1874	18 Sioux	1892
6 Pawnee	1848	2 Sioux	1875		
13 Oto & Missoun	1854				

(James C. Olson, *History of Nebraska*, 1966 による)

後にのべるように，北西部地域は極端に雨量が少なく，高地性の気候のため農業には不適とみなされ，最後までインディアンの土地となっていたが，鉄道や道路の延長にともなう用地の確保のためにまず狙われ，次いでブラック・ヒルズ（インディアンにとっての猟場で聖山，現在はラッシュ

モア山の岩壁に彫られた4大統領像で有名）山中で金発見の噂が飛んで白人が殺到してトラブルが生ずると，白人の立入りを禁じた68年の条約を無視して収奪に及んだ．要するに，理由の如何にかかわらず，白人はインディアンの土地が必要となれば，それを奪ったのであった．

☆

ネブラスカへの白人移住者の流入はネブラスカが準州となった1854年頃からはじまり，1860年頃の約3万の人口は90年には100万を突破し，わずか30年間にその数は30倍以上に達した．現在の人口が約155万であることを考えると，当時の短期間の異常なほどの膨脹ぶりが伺われる．これらの流入人口はネブラスカ州をいわば扇をひろげてゆくように，東から次第に西に向って滲透していった．ネブラスカの北西部の狩猟的インディアン部族の組織的な抵抗がはじまったのは1860年代後半からである．彼らが次々と土地を白人に譲り渡していった19世紀前半での白人とのトラブルは局部的なものであり，旅行者に対し，馬や食糧を目的とする盗賊的行為が主だったものであった．しかし，彼らの本格的な抵抗がはじまるのは，彼らが存続するために最低限必要な生活条件と最後の土地（とりわけ，ネブラスカ北西部の土地）と生活の支えであった家畜や穀物や野牛を奪われる危機に直面するようになってからであり，それは追いつめられたものの必死の戦いであった．その時期は，南北戦争の終った60年代後半にはじまり，90年に終熄する．

西暦	人口
1854	2,732
1860	28,841
1870	122,993
1880	452,402
1890	1,058,910

James C. Olson, *History of Nebraska,* 1966

大陸横断鉄道の建設は1862年に着工され，69年に完成したが，この中央路線をはじめとし，次々に新たな鉄道路線が延長されていった際，鉄道会社は沿線両側に幅20マイルづつの用地を確保していき，用地はネブラスカ（1854年準州，1876年州成立）の登録地総面積の17パーセントにも及んだ．この際，この大平原に棲息していた数百万頭の野牛（バイソン）が組織的に殺戮され，

80年代はじめには殆ど絶滅にひんした[8]．鉄道会社と投機的な土地業者はアメリカ東部で入植の利点を誇大に宣伝する一方，「自作農場法（ホーム・ステッド・アクト）」（1862年）は5年の定住で無償の土地が手に入る保障をしたため，たちまち大量の移住者が流入しはじめることになる．1890年頃に，自由地が登録しつくされたとき，インディアンの土地も収用しつくされ，彼らはすべて保留地という名の荒蕪地に封じ込められていた．白人にとっての辺境の終焉の時期は，インディアンにとっての自由の終焉の時期でもあった．1890年の暮れ，ネブラスカの北の州境に近いウーンデッド・ニーで生じた第7騎兵連隊によるスー族の大量虐殺を最後に，ネブラスカのインディアンは完全に平定された．

第2章　征圧の論理

コロンブスのアメリカ「発見」より1万ないし3万年前から先住民族はその地に住んでいたのだが，17世紀白人の入植がはじまると，白人開拓者たちはインディアンをその生地から駆逐しはじめた．その信じられないほどの残酷な方法は大量虐殺から絶滅を意図した病原菌の伝播，徒歩の強行軍による強制移住，悪条件の保留地への封じ込め，その他枚挙のいとまなしで，こうしたことによってインディアンの多くの部族は絶滅するか人口が激減した．新大陸発見当時北米に百万人はいたと思われたインディアンは，今世紀はじめには⅓に減っていた[9]．このようなことをここでもち出すのは，ネブラスカのインディアンが蒙った苦難は，いわばそれまでの北米インディアンがたどった道の延長上に存するに過ぎないことをあらためて確認するためである．

「すべての人間」の自由と生命と幸福の追及の権利をうたった「アメリカ独立宣言」の起草者であるジェファソン大統領が対英戦争の時期に「……今や我々はインディアンたちが絶滅するまで追撃しなければならない．もしくは，彼らを我々の近傍から遙か遠くの新しい位置に放逐しなければ

ならない」と述べ，インディアンの強制移住と保留地への封じ込めの最初の路線を引き，インディアンの文明の抹殺政策を推進した大統領であったことを想起すべきであろう[10]．これは「自由の旗手」たるジェファソンの「偉大さ」のイメージを少なからず崩すことになるかもしれない．しかし，博物学者でもあったジェファソンのインディアン観は，その当時の欧米人の一般的な意識に比べるとはるかにインディアンに対して高い理解度を示している．『ヴァジニア覚え書』(1782年）のみを読む人にとっては，ジェファソンは北米インディアンを，肉体的にも精神的にも「ヨーロッパ人（ホモ・サピエンス・オイロペウス）」と同じ尺度でつくられており，単に未開であるにすぎないとみるばかりか，能力によってはヨーロッパ人をしのぐところがあると力説した人としての印象を与えるものである[11]．ジェファソンのこのインディアン観それ自体が，旧大陸の博物学者ビュフォンの偏見に対する経験的事実に裏づけられた強力な批判であり，充分に価値のあるものであった．「すべての人間」（たとい黒人やインディアンは含めずとも）が自由を平等に享受する権利を有すると宣言する「独立宣言」の精神自体が，当時革命的な意味合いを担ったことを考え合わすとき，インディアンを未開の「人間」とみとめたことは，やはりジェファソンの先見の明と言うべきであろう．とは言え，ジェファソンは博物学者である以上に大統領であり，それが後にインディアン隔離策を選ばせたのであった．

しかし，インディアンが先天的に劣等なのか，後天的に未開なのかということは，入植者にとってはさほど問題とすべきことではなかった．入植者からすれば，「インディアンは経済的な進歩を妨害するので絶滅しなければならない野獣とみられていた[12]」ということは疑えない．——この考え方は，北アメリカへの白人の移住がはじまる一世紀前，スペインの中南米征服時のインディオに対するスペイン政府の考え方と軌を一にしている．いわゆる「バリャドリ大論戦——1550—51年」において，人文学者セプルベダはアリストテレスの『政治学』の中の一節「ある人びとは生まれなが

らにして奴隷である」を根拠に，インディオはまさしくその「奴隷」に相当するとして，彼らに対する正義の戦争の論理を組みたてた．それに対し，インディオへの宣教師であったラ・カサスは，インディオは先天的に劣等な奴隷人ではなく「人間」であるが故に，彼らに戦争をしかけて侵略するのは「不正であり，我らを導くキリストの教えに反する」と宣言した[13]．ここにみられる2つの対立点はそのままアメリカ合衆国史の中で繰り返され，軍事的征圧と宗教的馴致という混合政策がとられたのである．これはアリストテレスの師プラトンが『国家』の中でソフィストのトラシュマコスに「正義とは強者の権利にほかならない」と言わせている力＝正義の論理の悲しむべき実現であった．プラトン自身はこの権力＝正義というかたちで力と価値を混同する一種の無法を摘発する側に立ち，そのために生命を捨てた師ソクラテスの遺志を継いだ人であった[14]．また，アリストテレスは生産体制を「奴隷制」の上においたが，ディオゲネス・ラエルティウスによれば，実生活において，彼は「奴隷」の人格を認めていた[15]．『政治学』には次の記述がある．「またある人々には主人が奴隷を支配するのは自然に反していると思われている．ある人が奴隷であり，また他のある人が自由人であるのは人の定めによるので，決して自然には違いがあるのではない，従ってそれはまた正しいことではない．何故なら強制的だから，というのである[16]」（傍点，筆者）アリストテレスを持ち出してインディアンに対する侵略戦争を正義とするとは牽強付会もはなはだしいと言わねばならない．

この「強者の権利」の感覚こそが，倫理の前に権益を優先させる「拡大の天命（マニフェスト・デスティニー）」の源泉だったのであり，これは19世紀にはじまる用語を用いれば「帝国主義」――つまり，他民族に対する侵略を巧妙な「神話」で隠蔽する拡張主義の論理――だったのである．

こうした傾向に対する国内的批判がなかったわけではない．アメリカ政府がインディアン部族に対してとってきた苛烈で非人道的な方策をヘレ

ン・H・ジャクソンは『恥ずべき一世紀』（1881年）の中で手きびしく批判した．彼女は合衆国政府がインディアン部族との間に締結した条約を繰り返し無視し，国際信義にもとる行為を行なってきたことを非難したのち，次の意味のことを言っている．「インディアンを条約締結の能力がある勢力（パワー）もしくは国家と考えたことは馬鹿げたことであるとする論理は，アメリカ政府が過去に犯した条約違反を弁護するためのものである．インディアンが部族としては“国内従属国”という変則的な地位，個人としてはさらに変則的な成人“被後見人”の立場におかれてきたのは，条約を締結する能力は法律的にもっていなかったためと言えるが，アメリカ政府は樹立後一世紀にわたりインディアンを名称や称号については国家として扱いつづけ（1871年，インディアン部族を条約締結対象の外国と認める制度は廃止された—筆者），善意と誠意の誓言だけは，以前にもまして厳粛に行いながら，その間，数限りない収奪の暴挙と残虐行為が条約の名のもとに，あるいはインディアンの条約違反の口実のもとに行なわれた[17]」——このように彼女は述べたのち，1880年の連邦議会は過去の暴虐を反省し，インディアンに対する人道主義的な立法の措置を講じ，一世紀にわたる汚辱を救うべきだと訴えた．しかし，インディアンへの予算を論じた議会は彼女の忠告に殆んど注意を払わなかった．ヘレン・ジャクソンがこういう抗議を政府につきつけた翌年，1881年ネブラスカ北東部のミズーリ沿岸に保留地を得たポンカ族は，誤った政府の処置によって，その緑濃き保留地を知らぬ間にスー族に移転され，年毎のスー族の侵害によって疲弊するということが起った．ポンカ族が訴え出ると，かねてからその沃野を狙っていた移住者にその土地を開放するため，政府は彼らをオクラホマのインディアン・テリトリーに強制移転させた．その強行軍の途中に⅓以上の人口を失い，酋長スタンディング・ベアがたまりかねて訴えた悲痛な抗議がジャーナリズム，法曹界にとりあげられ，「人身保護法（ヘイビアス・コーパス）」をインディアンに適用することを渋る政府も世論におされ，彼らのうち希望者にナイオブララ河

畔の故郷に近い土地が個別にふりあてられた[18]．これは彼女の声が多少とも東部のジャーナリズム，法曹界にとどいたことの結果かもしれない．しかし，ポンカ族のケースはインディアンの他部族が等しく類似の要請をなすかもしれぬとして警戒され，インディアンへの締めつけは逆に強められた．

ヘレン・ジャクソンのインディアン観に真向から対立し，彼女ら人道主義者をセンチメンタリストと憤激をもってきめつけ，当時の一般的風潮を代弁するようなかたちをとったのが，シオドア・ローズヴェルトの「『恥ずべき1世紀』批判」(1889年）である．彼は次のように述べる．「インディアンは土地を所有していなかった．彼らの所有権は白人の猟師が請求する程度のものでしかなかった．1ダースほどのむさ苦しい野蛮人が数千平方マイルもの面積の土地で，ときどき思い出したように狩りをするくらいで，これを無条件に保有していると考えれば，白人の猟師，無断居住農民，馬泥棒，放浪する牧畜業者等の土地請求権も当然認めなければならなくなる．」「一世紀前，わが国の中央政府はきわめて弱体で，国民を統制しきれず，辺境で完全な秩序を確保することはむつかしく，インディアンを個人として扱うことはありえず，部族を国家として扱う以外に方法はなかった．……われわれは実行不可能なことを約束したことが多かったのであるが，意識して不正を働いたことはなかった．アメリカ政府はどの部族にもいつも公正に接するように努力していた[19]．」

流石にアメリカ大統領になるだけの人だと思わせるこの筆致は，過去のインディアン政策を大筋において是認することで移民大衆を納得させ，政府批判もあくまで過去の力量不足にもとづく弱腰の姿勢の批判にとどめ，他方強気の西部男（カウボーイ）（彼自身は20代にダコタの牧場で働いたことがある）らしい発言で，30歳ながら早くも秘めた権勢欲が文体の行間に伺われる．彼はヘレンその他の人道主義者の「感傷主義」を十把ひとからげにこきおろした挙句にこういう「これら馬鹿げた感傷家たちは，自国人について嘘っ

ぱちの中傷を書きちらすだけでなく，自らインディアン管理のあらゆる問題に鼻を突込む最低の助言者である．彼らは少しシェリダン将軍の辛辣な言葉に耳を傾けるがよいのだ[20]．」

こういう人物をのちに大統領に選んだアメリカ国民が，国内的にフロンティアが消滅すると海外に向けて侵略的な軍事行動に打って出るのは不思議ではない．シェリダン将軍の辛辣な言葉とは，多分，ほかならぬ次の言葉を指すのだと思われる．「良いインディアンは死んでいるインディアンだけだ．」——シェリダン将軍はカスターの率いる第7騎兵連隊にブラック・ケトルの率いるシャイアン族を蹂躙させたあと，捕虜を前にしてこの言葉を吐いたのだった[20]．

T．ローズヴェルトがこの書物を世に問うた次の年，ネブラスカ北境付近のウーンデッド・ニーにおける大虐殺が行われた．ヘレン・ジャクソンが間接的にポンカ族を救ったとすれば，T．ローズヴェルトは間接的にスー族の虐殺を招いたことになると言えば言いすぎであろうか．ウーンデッド・ニーからほど遠からぬところにインディアンのかつての聖なる地ブラック・ヒルズがある．その山中のラシュモア山の大岩壁に巨大な T．ローズヴェルトの顔が彫りつけられているのは，インディアンにとって屈辱であろう．

第3章　征圧の完了

白人に追われ収奪されてゆくインディアンの悲劇的な叙事史を描いたディー・ブラウンは，その著書の中で，1867年シャイアン族の酋長たちを前にウィンフィールド・スコット・ハンコック将軍が語った次の言葉を記している．

> 白人たちはすばらしい早さでこちらに向ってくるので何をもってしてもそれをくい止めることはできない．東からやってくるし，西からもやってくる．まるで強風にあおられた平原の炎のようにだ．何もそ

の勢いを止めることができない．その理由は，白人は非常に数が多く，絶えずひろがってゆくということだ．白人は広い場所を求めるが，それは致し方のないことである．……おまえたちは部族の若者にそれをくい止めようとさせてはならない[21]．

こうした「拡大の天命（マンフエスト・デステイニー）」の意識は西部の開拓者たちに一様にみられ，ワイオミングのオグララ・スー族の土地に眠る地下資源開発を目指したビッグホーン協会の会員の意識でもあった．

豊かで美しいワイオミングの渓谷は，アングロ・サクソン民族が占有し，保持することを運命づけられている．いつとも知れぬ昔，われらの山の雪におおわれたいただきの下に隠された富は，文明の前衛たる宿命をになった勇敢な精神への報酬として，神がそこに下しおかれたのである．インディアンは，つねに前進し，日ごとに増大する移住の波をよけ，あるいはそこに呑みこまれてしまわなければならない[22]．

移住者の侵入に抵抗し，土地を売り渡すことを拒んだ部族は，必ず軍隊によって掃討され，力づくで保留地へ送り込まれた．それは「戦争というよりは，野獣を追いつめるのに近かった．各部隊がおたがいに張りあって，どちらが先に獲物を仕止めるかを競った[23]」（ジェファソン・C・ディヴィス将軍）という表現に端的にあらわれている．インディアンの土地を収奪してゆく方式は，まず内務省派遣の委員が彼らの生活圏を限定する協約を結び，彼らに所有地の領域を認めさせ，次いで所有地の通行権を求め，認められると通商の安全の確保のために少数の警備兵が砦に派遣され，農民，牧畜業者，採掘者がその地方に魅力を抱いて入りこみ，地域の部族といざこざを起すと，その際受けた被害は誇大にしかも一方的に喧伝されてワシントンに届き，陸軍長官の命令で軍隊が出動する．手ひどい抵抗にあって平定に手こずると更に大量の戦力が投入され，内務省派遣の委員はその威圧のもとでインディアンに土地の割譲をせまる．拒否されると爾後の処置

は軍当局に委ねられ，殆んど例外なく各個撃破的に徹底した殲滅作戦に転ずるというやり方であった．インディアンの討伐には，合衆国陸軍の正規軍のほか，州兵，民間の自警団，さらには，インディアンが「バッファロー・ソルジャー」とよんだ黒人部隊，または帰順したインディアン戦士までを（たとえば，スー族討伐にポニー族やクロー族を用い，後にはスー族内部の不穏分子を活用するやり方で）討伐隊や警官に採用した．

こうして，アメリカ政府側の圧倒的兵力と火力の前にインディアン部族は屈服するか，はじめから敗北が予想される戦いを強いられた．彼らは乏しい銃と弾薬を，弓矢，槍，戦斧で補い，勇敢に抵抗して虐殺されるか，屈服させられて軍刑務所に拘留されるか，多くの死傷者を出したあと山中に逃げた．空しく安住の地を求めての逃避行の途中，女，子供，老人などは飢えと寒さ，あるいは炎熱と疫病のため次々に死んで行った．彼らもやがて，追撃する軍隊に捕獲され，収容所までの長い距離を強行軍させられるのである．こうした，類型的なパターンはインディアンの討伐史の中で無数に繰り返され，インディアンの部族のバンドが小さければ小さいほど彼らの部落の消滅につながる虐殺や虐待の可能性は大きかった．

こうしたインディアンの悲痛な抵抗史の中でもスー族のように戦闘的で単位の大きい部族によって一時的，且つ局部的な勝利がかちとられたこともあった．例えば，オグララ・スー族のレッド・クラウドが約3千の戦士を率いていた1866年頃，若い戦士で戦術に秀でたクレージー・ホースと共に，ダコタ等の他部族との連合戦線を組んで討伐軍をパウダー・クリーク（ワイオミング州）地方から敗退させて政府の道路建設を撤回させた上，フィル・カーニー砦とリーノウ砦を68年に放棄させたのがその一例である．その結果，彼らはアメリカ政府と「1868年条約」を結び，以後二度と侵犯されないという約束のもとに，ネブラスカ北方地及び南北ダコタ州に相当する土地に移動することを了承した．しかし，その4年後，南ダコタのブラック・ヒルズ（インディアンにとってこの世界の中心で，聖なる山）に

大量の金がみつかり，千人にあまる礦山師が殺到すると，政府はその土地の買い上げに積極的になり，スー族が礦山師といざこざを起しそうになると，政府は軍隊（たとえばカスターの指揮する第7騎兵連隊）を派遣し，インディアンの許可なしに，ブラック・ヒルズに監視所を設営する軍事侵略を行い，強制買収措置に出て，インディアンに再登録を要求したが，豪雪で失敗し，翌年になって大々的な軍事占領に向った．「カスター将軍の最後」（1876年6月）はその時期に起った．その年の春，オグララ・スー族はシャイアン族，その他の部族は，馬の放牧と狩猟の旅に出て，パウダー・クリークの西方，ロッキー山脈に近いリトル・ビッグホーン川付近で合流，約1万人（うち戦士3千）が野営中，政府軍の急襲を受けた．シェリダン将軍の命で第7騎兵連隊を指揮していたジョージ・アームストロング・カスター将軍は，シッティング・ブルやクレージー・ホースなどの優秀な戦闘酋長の率いるスー族やシャイアン族の戦士に翻弄されて惨敗し全滅，カスターは戦死した．これはアメリカ陸軍のインディアン討伐史上最大の敗北であった．しかし，このことが全米に過大に報道されたため，報復を叫ぶ白人の声が高まり，ワシントンからの訓令を得て，討伐は一層苛烈なものとなった．インディアンは多くの犠牲者を爾後の戦闘で失った上，シッティング・ブルはカナダに逃亡，クレージー・ホースはネブラスカのロビンソン砦で謀殺された．スー族の保留地はシャーマン将軍の指揮する軍の管理下におかれ，保留地のインディアンは戦争捕虜の扱いを受け，供給食糧の絶対量の不足の上に，管理所の食糧横流しの不正のため，たちまち，飢えにさらされた．政府委員はこうした状況をつくった上で1868年条約を無視して，一方的にパウダー・リバー地方とブラック・ヒルズのほか，ネブラスカの広大なインディアン所有地を手渡させる書類に調印することを迫った．拒めば狩猟用の銃器を含めて全員を武装解除して，全部族をオクラホマのインディアン・テリトリーに強制移転させると脅した．スー族大酋長のレッド・クラウドをはじめ，スポッテド・テイルをはじめとする

他酋長は武装解除と強制移住が部族の破滅につながると考え，やむなく署名し，サウス・ダコタの南境の帯状の荒蕪地に移住することになった[24].

☆

ウーンデッド・ニーの虐殺にふれるには多少のいきさつの説明が必要であろう．1877年，パウダー・リヴァー地方もブラック・ヒルズも失い，更にネブラスカの北方地域も失って，サウス・ダコタの南端の居留地に封ぜられたスー族は，この荒蕪地でなれない農耕をはじめようとしていた．彼らは馬も銃もとり上げられ，衣食にも事欠く状態におかれ，パイン・リッジとローズ・バッドの二つの保留地に分割されて居住し，それぞれ，ネブラスカの二つの砦，ロビンソン砦とナイオブララ砦に駐留する軍隊の監視下におかれていた．しかし，新たに東からミズーリ河まで延長してきた鉄道は白人移住者たちを更に西漸せしめ，スー族保留地を通ってモンタナに向う道路建設を要求していた．

スー族の戦闘酋長シッティング・ブルが4年のカナダ逃亡ののち，アメリカ政府の要請で送還された1881年，スポッテド・テイルは寝返った部下に殺された．シッティング・ブルはサウス・ダコタに戻り，2年の監禁の後，保留地に帰った．彼はバッファロー・ビル（ウィリアム・F・コディ）一座のワイルド・ウエスト・ショーに加わって，全米15都市及びカナダを興行してまわり人気を博したが，折あるごとにインディアンの窮状を人々に伝えた．

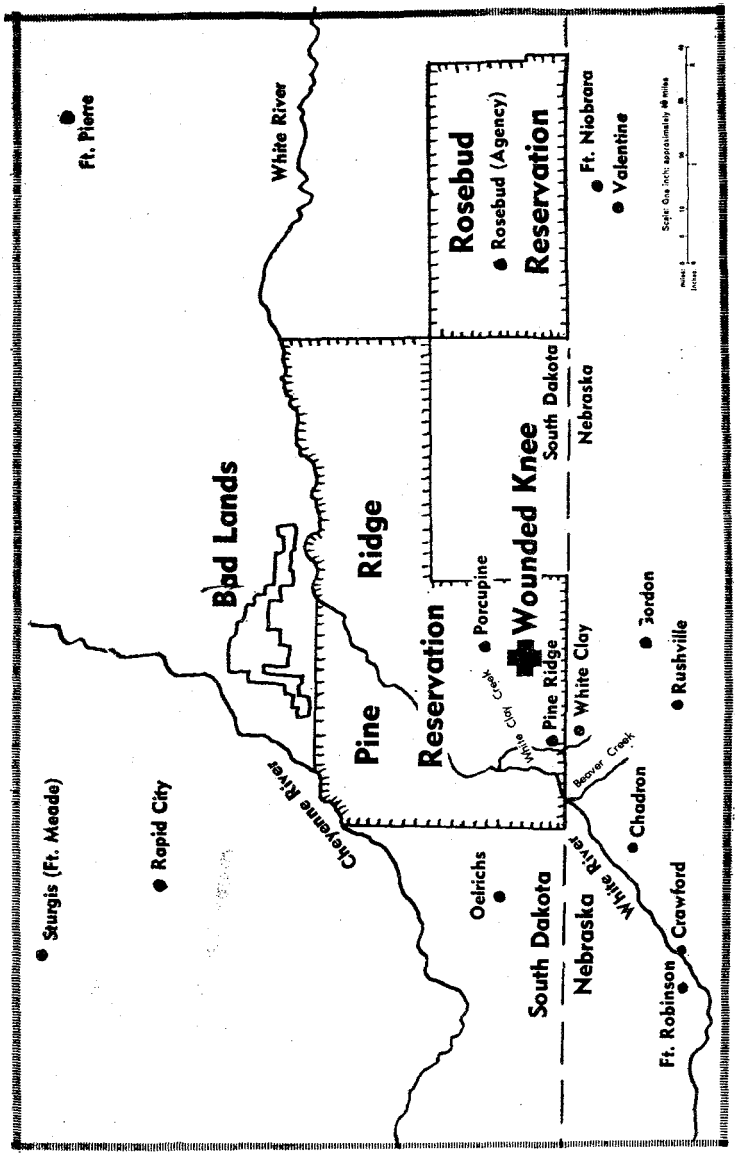
1888年，政府は委員を派遣し，スー族保留地から新たに百万エーカーをけずり，移住地として開放する提案をしたが，シッティング・ブルの拒否に会って難航し，翌年の交渉ではシッティング・ブルに内密で土地譲渡の署名を他の酋長から集めた．1890年，保留地では幽霊踊り（ゴースト・ダンス）が流行し，キリストの再臨と白人の駆逐，死んだ戦士のよみがえりと野牛や野馬の復活を信じるインディアンが毎夜踊り明かし，居留地は異常な雰囲気に包まれた．ワシントンの政府当局は，これをシッティング・ブルの策動とみて彼を再

逮捕させたが，奪い返そうとしたインディアンとのこぜり合いの際彼は惨殺された．もはや，スー族の偉大な酋長で生き残っているのはレッド・クラウド一人となった．1890年12月28日，ビッグ・フットは一族を連れ，レッド・クラウドの庇護を求めてパイン・リッジに向った．彼らは騎兵隊に先導されてウーンデッド・ニーの騎兵隊キャンプに連れて行かれ，そこで一夜を過した．

翌朝，第7騎兵連隊長フォーサイス大佐の命令で武装解除が行なわれた際，一人のインディアン戦士が自分の買った新しいウィンチェスターを惜しんでいた．彼が殺気だった兵士に突きとばされて床に転がった時，銃声が響き[25]，兵士が倒れ，それがきっかけとなってたちまち見境いなしの殺戮の修羅場が展開した．インディアン戦士は解除された武器をとろうとナイフで兵隊と渡り合い，兵隊は所かまわず銃を発射し，逃げまどう女や子供たちを丘の上に据えたホッチキス銃（機関銃の前身）が掃射した．その際，ビッグ・フットは直ちに殺され，「350人を数えた男と女と子供のうち，最終的には合計300人近くの死者を出したということである．兵隊は25人の死者と39人の負傷者を出したが，その大半は味方の銃弾や榴散弾によるものだった[26]」

スー族のブラック・エルクは当時，遠方で激しい銃声を聞き現場にかけつける途中，分遣隊に釘づけにされ，すべてが終ったときに現場に到着した．兵隊たちは，インディアンの生き残りと死んだ兵士と負傷兵を連れてロビンソン砦へ帰ったあとであった．

> 男たち，女たち，それに子供たちの屍体が，小高い丘のふもとの平らな場所のいたる所に折り重って散らばっていた．丘の上に兵隊たちはワゴン銃をいくつもすえていたのだ．屍体の列は，そこからずっと西の方に散らばり，水の枯れた峡谷沿いにずっと上の高い尾根のあたりにまで，死んだ女たち，子供たち，それに赤児たちが散らばっていた．……



(Don HUls (ed.), *The Winter of 1890* より引用)

Map shows the area of Nebraska and South Dakota involved in the Indian difficulties which culminated in the Battle of Wounded Knee.

これら全てが起こったのは，良く晴れた冬の日だった．日が良く照っていた．しかし，兵隊たちが去った後，雪が降り始め，それは次第に激しくなった．夜になると風が起った．大吹雪になり，大変な寒さになった．雪は曲りくねった峡谷の上に吹き寄せられ，谷全体が1つの長い長い墓になった．雪の下に，虐殺された女たち，子供たち，それに赤児たち，ただ何とか逃げようとしただけの無辜のものたちが埋められた[27]．

第4章　パイン・リッジ

ウーンデッド・ニーの虐殺を最後にインディアンは完全に征圧された．インディアンに対するアメリカ政府の力づくのインディアン部族の解体の姿勢（それは典型的には1887年の「ドーズ土地割当て法」にあてられている）が変るには，それから約40年を要した．F. D. ローズヴェルト大統領のニューディール政策はインディアン対策にも及び，旧来の方式をあらためインディアンの伝統的な文化と共同体的社会生活を尊重する方向に向った．1934年の「インディアン再組織法」は個人に対する土地割当てを中止し，従来公売に付されていた部族の余剰土地を再び部族に付与するとともに，部族の自治を促し，インディアンの経済状態の改善を目的としている[28]．1938年，インディアン事務局長ジョン・コリァーはインディアンに対する理解と同情を示し，新しいインディアン政策を『内務長官年次報告書』の中で明らかにしている．

その中で，彼はこう報告している．

「インディアンの土地をとりあげる仕事は白人が討伐軍や条約代表団によって開始し，現金買いをもって完了した．いうまでもなく，インディアンに残されていた最良の土地を買い上げたのである．1887年（ドーズ法の成立の年），インディアンには1億3千万エーカーの土地があった．1933年には，その手には4900万エーカーしか残らず，しかも多くは不毛の砂漠

であった.」「インディアン事務局の主目的は，インディアンが現在所有している土地をすべて彼らがもちつづけ，総合整理するのを助けること，そしてまた有効に生活を送ることができる，より広い，より良質の土地を提供することである．同様に重要なのは，インディアンの土地の利用がそのまま土地を保全し，彼らの自立を保障し，社会生活を保護，あるいはつくりあげることにつながるよう，彼らを助けようという課題である.」[29]

1969年のサンフランシスコ湾アルカトラス島占領などにみるように，1960年代末から激化してきたインディアン・ナショナリズムの動きは，本稿でも引用した70年のディー・ブラウンのベストセラー『わが魂をウーンデッド・ニーに埋めよ』やベトナム戦争反対運動に呼応して世界中にひろがった．それは毛沢東思想とヒッピー文化の時代的潮流にのって更に激化し，1973年「アメリカ・インディアン・運動」(AIM) の指導的メンバーであるラッセル・ミーンズが警察に逮捕されると，2月28日 AIM は今や北米インディアンの象徴であるウーンデッド・ニーを占領し，「スー族国家」の政治的独立を宣言し，それが TV 中継されると全米の注目を集めた．AIM の目的は全米インディアンにとっての聖地であるウーンデッド・ニーの大虐殺地を占領することで，全国民の注目をひきつけ，インディアン居留地の貧困を世に知らしめようとしたのであった．他方，AIM はウーンデッド・ニーの二か月後に，アメリカ政府がインディアンと結んだ条約を破ったことを根拠に，サウス・ダコタ州のミズーリ河以西をインディアンに戻すよう要求した[30].

ウーンテッド・ニーの虐殺の傷あとは深い．アルフォンソ・ピンクニーはそれをヴェトナム戦争での米軍の残虐行為につながるものと考えて次のように述べている.

> ピーコット族の虐殺，ウーンデッド・ニーの虐殺を行った人々の子孫が，ミライ第4地区とデトロイトで大量虐殺をおこなった人々の中にいる.[31]

ヘレン・ジャクソンは，今から百年前次の意味のことを書いた．「まいた種は刈り取らねばならないというたとえのとおり，インディアンに対するアメリカ政府の犯してきた悪業の報いとして，アメリカ国民は必ず天罰を受けねばならない[32]．」今日，アメリカの大都市の荒廃と暴力の横行はその天罰のひとつのあらわれであろうか．

ウーンデッド・ニーの裸の丘の上の真白の教会は1973年の事件のあと，不審火で全焼した．

☆

ネブラスカ北西部のロビンソン砦は今日，州立公園に指定され，国有林の丘陵を遠くに望み，広々としたかつての練兵場の真中に星条旗がひるがえっている．まわりに点々と並ぶ兵営の建物群は考古学や歴史博物館，レジャー用諸施設になっており，近くのホワイト・リヴァーでは鱒釣りができる．インディアン戦闘酋長のクレージー・ホースがかつての部下だったインディアン警備兵に謀殺された管理所営倉の建物も復元されてあり，昔日の連隊長宿舎では南北戦争時の「青服」（北軍）を着用した博物館員たちが，同じく当時の婦人服を着た夫人たちと午後のお茶に接待してくれる．クロッケーをして遊ぶ人のみえる庭は広々とさえぎるものもなく，数キロ先の崖下までの草地となってひろがっている．ウーンデッド・ニーの悲劇のあと，多くのインディアンはこの地まで足をひきずって歩き，ここで死んだものもいる．博物館員はわたしたちを，日輪踊(サン・ダンス)りの広場に案内した．直径30メートルほどの円型広場(アリーナ)を囲むようにしつらえた木組みのアーケードのようなものがあった．この上に松の枝を積んで日陰をつくって，インディアンたちは全員が踊りに参加したのだった．

ロビンソン砦から直線距離にして約80キロの地点にスー族のパイン・リッジ居留地がある．東西130キロ，南北70キロの矩形の土地に現在約1万5千のインディアンが住んでいる．その中心地パイン・リッジは人口3650人（1975年）—1940年に750人だった人口は5倍になった．海抜は平

均約1500メートル．町は起伏が多く，街路樹も日陰を落しているが，土地は砂礫の多い赤い粘土質の土壌である．居留地の北方は草木の生えない赤い涸れ谷がひろがっている．パイン・リッジは一見した印象では，日本の東北地方の小都市の郊外住宅地を思わせる．

この町には会社がわずか三つ．製靴工場（従業員285人），インディアン人形製作所（従業員15人），電気部品製造所（従業員30人――これはウーンデッド・ニー・エレクトロニクスという名称の会社である）．いづれも労働組合はない．あとはすべて下請をもっぱらとする零細の家内工業である．政府のインディアン部局では200名が勤務，その他，オガララ，スー族自治区役所に450名．高校2，一つはカトリック系で学生数は282人と208人，中学1，小学校1，高等教育機関はない．年間高校卒業生数，男31，女43．1番近い大学は約50キロ離れたシャドロン大学である．労働人口，男1506，女1145のうち，就労人口は男1170，女1002．男子の800人が低賃金の季節労務ないしパートタイムの賃仕事に従事し安定した企業への就職を希望している．失業者数，男640，女490．ちなみに労賃は時間給で技術職が約4.5ドル，熟練労働が3.8ドル，筋肉労働が2.3ドル程度である．教会はカトリックのほか，あわせて7宗派がある．郵便局，警察署，消防署，病院，図書館（2万5千冊），老人ホーム（46ベッド），ホテル（14室）のほかマーケット1，給油所2．電話加入者数は全保留地で525．一番近い鉄道駅が40キロはなれたネブラスカのラッシュヴィル．バス路線なし．タクシーなし．オガララ・スー族用老人用バス2台．ローカル新聞なし．ラジオないしテレビ放送局なし[33]．

これが北米インディアンの象徴であるウーンデッド・ニーを囲むパイン・リッジの現状なのである．

あとがき

現在，アメリカにおけるインディアンの全人口は80万弱，そのうち50万

前後が居留地で暮している．失業率，全米平均の8倍，所得3—4割．平均寿命は50歳に満たない．（朝日新聞日曜版，1978・10・15）

こうした苦境におかれながら，アメリカ・インディアンは徐々に立ち直りはじめている．平均寿命の低さがある一方，人口構成は若年層が多い．それだけに，インディアンには未来があり，若い世代がどのように育って行くか期待される．彼らの中にはアルコール中毒患者も多いが，凛然としたプライドも目覚めはじめており，それは次に示すパイン・リッジのレッド・クラウド高校生の詩にもよくあらわれている[34]．

STRUGGLE FOR EXISTENCE

You have tried to destroy us
Over these past years.
We fought and died.
We shed many tears.

We are slowly expanding.
We are not like you, greedy and demanding.

We shall make it someday.
To the very top
To a point where we shall
Never be stopped.

We live on . . .

Martha Randall

注

1 ネブラスカの風土と発展史については拙稿「ネブラスカ覚え書——その風土と歴史」同志社大学人文科学研究所『人文科学』第9号（1978年12月）を参照．

2 James C. Olson, *History of Nebraska* (Univ. of Nebraska Press, 1966), p. 4.

3 *The Dictionary of American History* (Scribners & Sons), "Indian Removal" の項.

4 Alphonso Pinkney, *The American Way of Violence* (Random House, 1972.)『アメリカ暴力史』大島良行訳, (早川書房, 1972年), 132–37頁.

5 本稿におけるネブラスカのインディアンについての概説的記述は主として前提オルソンのネブラスカ史, 事実関係は下記のブラウンの著作を参考にした.

Dee Brown, *Bury My Heart at Wounded Knee* (Holt, Rinehart & Winston, New York, 1970.)『わが魂を聖地に埋めよ』鈴木主税訳. (草思社, 1972年.)

6 Dorothy Weyer Creigh, *Nebraska—A Bicentennial History* (New York: W. W. Norton & Co. 1977.) p. 72.

7 Henry Nash Smith, *VIRGIN LAND: The American West as Symbol and Myth*, (Harvard Univ. Press, 1950,)『ヴァージンランド』永原誠訳, (研究社, 1966年), 219頁. ブライアントはケンタッキーの新聞人で1846年ネブラスカ西部の旅日記にこう書いた.

8 藤原英司『アメリカの野生動物保護』(中公新書, 1976年) によると, 最盛期のバイソンは北米に6千万ないし7千万頭はいたとされる. 1800年までにミシシッピ河以東のバイソンが全滅. 1830年から大平原のバイソンの組織的大量殺戮がはじまり, 平原地帯の花形産業となり, 1871年には一つの毛皮会社で25万枚のバイソンの毛皮が取引された. 1875年から83年までに中西部平原のバイソンが消滅, 1883年には北部でも殆ど消滅し, 1894年にはイエローストーン公園に逃げこんだ20頭が残るだけとなった.

9 ピンクニー前掲邦訳書『アメリカ暴力史』120頁.

10 島川雅史「ジェファソンとインディアン問題」(アメリカ学会発行『アメリカ研究』18号, 1978年.)

11 Thomas Jefferson, *NOTES ON VIRGINIA* (1782),『ヴァジニア覚え書』中屋健一訳, (岩波文庫), 103～110頁.

12 ピンクニー前掲書, 145頁.

13 Lewis Hanke, *Aristotle and the American Indians — A Study in Race Prejudice in the Modern World*, (1959),『アリストテレスとアメリカン・インディアン』佐々木昭夫訳, (岩波新書), 1974年, 58—69頁.

14 Jean Brun, *ARISTOTE ET LE LYCEE*, Collection《QUE SAIS-JE?》, (1961),『アリストテレス』有田潤訳, (白水社), 37頁.

15 藤井義夫『アリストテレス』(勁草書房, 1959年), 13—15頁.

16 アリストテレス『政治学』第一巻第三章, 山本光雄訳, (岩波文庫), 38頁.

17 Helen H. Jackson, *A Century of Dishonor* (1881); (Harper Torchbooks,

1965.)「『恥ずべき1世紀』第1章・序」平野孝訳,『アメリカ・インディアン』アメリカ古典文庫14(研究社),47頁.ただし,筆者の引用は内容を損わぬ程度訳文を短縮改変してある.

18 本間長世「アメリカ史における白人とインディアン」,前掲書『アメリカ・インディアン』8～9頁.ならびに,Olson, *op. cit.* p. 131 及びブラウン前掲書第15章(「スタンディング・ベア人間となる」)

19 シオドア・ローズヴェルト『西部の征服』第1巻――「ジャクソン『恥ずべき1世紀』批判」,平野孝訳,前掲書『アメリカ・インディアン』268, 272頁.

20 ブラウンはその言葉は正確には,"The only good Indian I ever saw were dead." だったという.Brown, *op. cit.*, p. 170.

21 Dee Brown, 前掲書邦訳上巻, 170頁.

22 同上,上巻210頁.

23 同上.下巻27頁.

24 インディアン討伐についての以上の記述は,その事実関係を主としてブラウン前掲書,オルソン前掲書のほか,Don Huls (ed.), *The Winter of 1890–What Happened at Wounded Knee*, (The Chadron Press, Nebraska, 1974), を参照した.挿入のウーンデッド・ニー付近図はこの書からの引用である.

25 銃を最初に発射したのがどちらの側であったのかは謎とされている.

26 ブラウン前掲書,下巻245頁.

27 J. G. Neihardt (Flaming Rainbow), *BLACK ELK SPEAKS* (1932),『ブラック・エルクは語る』弥永健一訳,(社会思想社,1977年),291, 293頁.

28 前掲書『アメリカ・インディアン』279頁の解説.

29 同上282頁.

30 同上12頁.(本間長世「アメリカ史における白人とインディアン」)ならびに,Dee Brown, "Wounded Knee and the American Indian," *Conflict in America* (Voice of America, 1976.)

31 ピンクニー前掲書,146頁.

32 前掲書『アメリカ・インディアン』49頁.

33 現況は筆者がパイン・リッジのインディアン部局出張所で入手した次の資料による.*Industrial Facts—Pine Ridge* (South Dakota, Area Development Department, Nebraska Public Power District, Columbus, Nebraska, 1975.)

34 Cited from *Voices of Red Cloud* (Red Cloud Indian High School, Holy Rosary Mission, Pine Ridge, South Dakota, Spring 1978.)